

広島デルタの川まちづくりにおける水辺空間の特性に関する分析

熊本大学大学院 学生会員 ○中村康佑
熊本大学政創研 正会員 田中尚人

1. はじめに

高度経済成長期の到来とともに人々の意識は水辺を離れ、都市は水辺に背を向けた。しかし 1970 年代以降、地域の特徴に配慮し、より地域との関係・連携を意識した河川整備計画が進められてきた。多様な水辺利用を促進することで水辺を中心としたまちの賑わいづくりをしようとする川まちづくりが目指された。戦後の川まちづくりの開始から 40 年以上が経過し、今日ではまちづくり活動の「場」として河川空間を利用することが重要になってきていると考える。空間整備とともに、その後の河川空間の利用を見据え総合的に川まちづくりを考えることが求められる。

そこで本研究では、計画的な水辺整備を行い、活発な川まちづくりが行われる広島市内の太田川下流部（広島デルタ）を対象に、広島の水辺整備の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 水辺空間の地理的特徴

本章では、広島の水辺の特徴を把握し、現況の「広島デルタ」の成り立ちを整理した(図-1).

特徴として放水路の存在がある。市内派川を流れる流量のうち半分以上を負担し、さらに5本の河川で流量を配分することで水害のリスクを大幅に減らしていることが安全な水辺空間の利用を促す背景にある。

また、雁木と呼ばれる階段護岸も特徴として挙げられる。市内派川は感潮区間であり水位差が激しく、舟運においていつでも着岸できるよう階段護岸が採用された。現在では戦前・戦後につくられたものを合わせて300基以上が存在し広島の水辺を特徴づけている。

3. 水辺空間整備の変遷

本章では、歴史的アプローチから広島の水辺空間が構成されてきた履歴を整理した。

舟運が活発だった頃の水辺は公共空間として利用され、にぎわいの場となっていた（図-3）。この時代から雁木の存在を確認でき、江戸時代から姿形を変えながらも現代まで存在し続ける構造物であるといえる。



図-1 広島の水辺の現況



図-2 広島の雁木



図-3 江戸時代の水辺利用の様子

また、水辺空間の整備に着目して整理した(表-1)。
流れをつくっているのが以下の3点であるとする。

(1) **河岸緑地整備の決定** 「広島平和都市建設計画」で平和記念公園の整備などと共に新たに計画決定された。

(2) 水の都整備構想 まちづくりと一体となった水辺空間の形成を目標としている。河川管理者と市街地整備主体が初めて共通の努力目標を設定した。市民参加の重要性を訴えるものの本計画では行政の取組に注力し、それらは以後の議論に譲るとしている。

	元安川親水テラス	基町環境護岸	京橋川ばた通り	猿猴川アートプロムナード
現況写真				
竣工年	1996(平成8)年	1983(昭和58)年	明治後期～大正期(推測、雁木の竣工年)	1997(平成9)年
概要	・原爆ドームの対岸に位置し、水の都ひろしまのシンボルとなる水辺として位置づけられる	・中村、北村らによる景観に配慮した基本設計 ・土木学会デザイン賞特別賞(2003)	・わが国最大の雁木群で、歴史的な水辺空間 ・社会実験を経てオープンカフェを常設運営	・「桜の緑側」、「水辺のギャラリー」の2つのゾーンで構成
水の都整備構想(1990)	・平和の水辺として位置づけ、交流や催しの場として空間整備するとともにとうろう流しなど祈りの場など多面的役割をもたせる	・後背の中央公園との一体的利用を意識 ・水辺でのレクリエーション的利用を想定した整備方針を設定している	・歴史資源を水辺空間の魅力化・個性化に活用 ・歩行者空間であることを意識しアクセスや賑わいづくりを目指す	・リバーフロント住宅整備を考慮、緑地の充実、歩行者ルートの魅力的なポイント創出を目指す
水の都ひろしま構想(2003)	・広島を代表する水辺として誇りある空間づくり ・とうろう流しなど平和記念公園隣接地をふまえた活用、活用しやすい環境整備を行う	・密度の高い利用が期待される水辺であり、まちと一体となった日常的利用支援なども考慮	・空間整備よりも利用面にシフト、商業施設との一体的利用を目指した賑わいのある水辺づくり ・雁木から雁木を歩く干潟ウォークの提案	・レトロ/アートの水辺づくり、晴れの舞台としての水辺の利用など駅や住居に近い立地を生かす ・回遊性を高めるため特色ある河岸緑地整備
アクティビティ	・水上タクシー「雁木タクシー」の発着所 ・とうろう流しの足場 ・水辺のコンサートの会場 ・代表景である原爆ドームの視点場	・映画の野外上映会 ・水辺の結婚式 ・水辺でのマルシェ／マーケット ・通勤通学、ランニングコースとしての利用	・昼時の休憩 ・独立店舗型／地先利用型のオープンカフェ	・猿猴川河童まつり

図-4 特徴的な4つの水辺空間

表-1 広島デルタの水辺整備の変遷

年代	出来事
1945(昭和20)年	第二次世界大戦終戦
1946(昭和21)年	復興都市計画道路・公園、緑地が整備
1949(昭和24)年	平和記念都市建設法制定
1952(昭和27)年	◆「広島平和記念都市建設計画」策定、河岸緑地整備を都市計画決定
1965(昭和40)年	太田川放水路が通水
1967(昭和42)年	河岸緑地整備四ヶ年計画
1971(昭和51)年	東京工業大学中村研究室と建設省太田川河川工事事務所が接触
1973(昭和53)年	「広島市河岸緑地整備基本計画」が策定
1975(昭和55)年	建設省による河川の高潮対策事業開始
1978(昭和58)年	基町環境護岸完成
1989(平成元)年	「リバーフロント建築物等美観形成協議制度」策定
1990(平成2)年	◆「水の都整備構想」策定
1991(平成3)年	元安川橋詰親水テラス 竣工
1997(平成9)年	元安川オープンカフェ 社会実験
2002(平成14)年	水の都作戦会議(都市再生プロジェクト)
2003(平成15)年	◆「水の都ひろしま」構想策定
2004(平成16)年	ふれあい水辺フェスティバル NPO法人雁木組設立、雁木タクシー運行開始 ポップラペアレンツクラブ活動開始

(3)「水の都ひろしま」構想 水の都整備構想以降、施設整備中心になっていた各種取組みを見直し、すでに整備された空間における活動の促進するため策定。「つかう、つくる、つなぐ」の3つの柱を立て、整備だけでなく利用も含めた構想となっている。

中村らによる基町環境護岸の設計などを含め、広島の水辺整備においては「つくり手」と「つかい手」の関係があることがうかがえる。水の都ひろしま構想でこれらが顕著に表れ、現在の水辺空間に影響している。

4. 特徴的な水辺空間の分析

現地調査や文献調査等を踏まえ、広島の水辺整備の特徴を表している特徴的な水辺空間を抽出した(図-4)。

(1)元安川親水テラス 原爆ドームを望む立地から平和の水辺の意味合いをもち、とうろう流し等で利用可能な空間として整備されている。水辺に近づけることから水上タクシーなど新たな活動にも結び付いている。

(2)基町環境護岸 設計した中村らは市民の水辺に対する意識・行動を分析し設計を行った。整備以前からあったポプラの木を残したことが後のNPO活動につながるなど、空間整備が市民活動に影響を及ぼしている。

(3)京橋川ばた通り オープンカフェが定着し、水辺の風景に馴染んでいる。オーナーが水辺の掃除をするなど、使い手が空間づくりに参加しているといえる。

(4)猿猴川アートプロムナード 他の地区と比較すると日常的利用やイベントなどは少ないが地域の祭りが開かれるなど、水辺を住民が活用する様子がみられる。

5. まとめ

広島の水辺空間整備の特徴として、「つくり手」と「つかい手」の相互関係が挙げられた。さらにこの特徴をよく表している4つの水辺空間を抽出した。今後は資料の精査を行っていくとともに抽出した4つの空間の検証を行っていきたい。

【参考文献】 1) 建設省、広島県、広島市；水の都整備構想，1990.3 2) 国土交通省、広島県、広島市；「水の都ひろしま」構想，2003.1

【謝辞】ヒアリング調査及び資料のご提供をいただいたNPO法人雁木組、ポップラペアレンツクラブ、ひろしまジン大学、太田川河川事務所の皆様に深く感謝申し上げます。